

# 文化芸術にできることを考えるための10冊

人をつなぎ、地域を豊かにし、社会課題解決の糸口となる。  
文化芸術の持つ無限の可能性をあらためて見つめ直すべきではないでしょうか。  
今号の特集の理解を深める10冊を紹介します。



## 6 『新しい広場をつくる』 ——市民芸術概論綱要』

劇作家として芸術文化の社会的役割を訴えてきた著者が、コミュニティと市民主導のまちづくりの拠点となる文化施設を「広場」と位置づけて論じる一冊。多様な課題解決につながる発想と方法論は、劇場の「外へ出ていく」ことで、人と人とのつながりと新たなエネルギーを生み出してきた北九州芸術劇場(8頁)の挑戦とオーバーラップする。

平田オリザ=著  
岩波書店／2013年



## 7 『震災と芸能』 ——地域再生の原動力』

吉本氏(32頁)にとって、文化的commonsに対する開眼の一契機となった東日本大震災後の地域芸能との出会い、岩手県各所の神楽、獅子舞、鹿踊など、地域の祭りや芸能が復興に果たした役割を現地調査し、多様な支援や文化施設との連携、新しい実演の形まで論じた本書は“入会地”としての文化的commonsの概念を実感するのに最適だ。

橋本裕之=著  
追手門学院大学出版会／2015年



## 8 『ソーシャルアート』 ——障害のある人とアートで社会を変える』

障害のある当事者、福祉関係者、アーティストらが参加し、「障害者アート」の枠を解き放ち、創造のエネルギーが社会を動かす25の現場を紹介。アート、福祉、コミュニティ、仕事を掛け合わせ、新たな価値を創造する試みを追った一冊。「障害」という切り口で表現の力や芸術の価値を見直すことで、芸術を通じた社会変革へのヒントが見えてくる。

たんぼの家=編  
学芸出版社／2016年



## 9 『みんなの社会的処方』 ——人のつながりで元気になれる地域をつくる』

伊藤氏(20頁)の「文化的処方」の考え方の根底にある「社会的処方」。本書は、孤立の処方箋としての「社会的処方」とは何かを解説し、誰もが地域で主体的に関わることの重要性を説く。アートを地域活動に取り入れた「アート処方」や住民による助け合いなど、具体的な事例も豊富に紹介。専門家任せにしない、新しい地域共生のあり方を提示する。

西智弘=編著  
学芸出版社／2024年



## 10 『現代美術史』 ——欧米、日本、トランスナショナル』

「何でもあり」ゆえに難解に思われがちな現代美術を、「芸術と社会」の関係を軸に、その歴史を紐解きながら、さまざまな作家や作品、芸術運動について解説する。副題にある通り、欧米だけでなく、日本を含む東アジア、エスニック・マイノリティなどによる美術史の項も充実しており、多角的な視点で現代美術を捉えている良書だ。

山本浩貴=著  
中央公論新社／2019年



## 1 『芸術文化の価値とは何か』 ——個人や社会にもたらす変化とその評価』

2012年から5年にわたり英国の政府機関「芸術・人文研究会議」が行った「文化的価値プロジェクト」の集大成。文化芸術の必要性和効果について、コミュニティ、経済、健康・幸福など多様な視点から論じる。客観的エビデンスが重視され、豊富な事例に方法論のヒントまで示した内容は圧巻だ。

ジェフリー・クロシック、パトリツィア・カジンスカ=著  
中村美亜=訳  
水曜社／2022年



## 2 『社会化するアート／アート化する社会』 ——社会と文化芸術の共進化』

社会学を研究する著者は、アートと社会が近づいていると言い、これを「社会とアートの共進化的動態」と捉える。ありがたく鑑賞する「芸術」から日常空間に進出した「アート」は、地域経済、コミュニティ、市民社会にまでかかわりを持つようになった。こうした現状と課題を読者に提示し、地域におけるアートの可能性を探る一冊。

小松田儀貞=著  
水曜社／2022年



## 3 『みんなの文化政策講義』 ——文化的commonsをつくるために』

社会資源としての文化芸術の実情に通じた著者が口語体で綴る、紙上の文化政策講義。宮沢賢治の芸術論に始まる市民参加から、文化政策の範疇、法整備、コミュニティ創生、アートマネジメント、文化施設や指定管理者の課題、創造都市と都市の権利、多様性と文化権など、吉本氏(32頁)の話の理解を深めるのに、必読の一冊だ。

藤野一夫=著  
水曜社／2022年



## 4 『「地域市民演劇」の現在』 ——芸術と社会の新しい結びつき』

地域に密着した市民演劇について論じた一冊。村芝居や素人歌舞伎のほか、宝塚歌劇のコピー劇団、高齢者演劇、大阪市西成区の通称・釜ヶ崎の住人による紙芝居劇団など、多岐にわたる事例を掲載。孤立しがちな現代において人々が集い、「役割」を得るなかで社会とつながっていく。演劇は、その触媒となる力を持っていると気づかされる。

日比野啓=編  
森話社／2022年



## 5 『最新版 歌舞伎の解剖図鑑』 ——イラストで小粋に読み解く歌舞伎ことはじめ』

巻頭対談の木ノ下氏(2頁)の言葉通り、古典は時代に合わせて新たな読み方ができ、またそうすべきものでもある。その際の土台になるのが、それぞれの古典の「基本のキ」を押さえること。本書は、歌舞伎の世界に通暁した著者が精密な絵と平易な文で、鑑賞のツボから役者の芸脈、名作演目の紹介まで幅広く綴った入門書として好適の一冊だ。

辻和子=著  
エクスナレッジ／2022年

